

資料

大学生のアパシー傾向に関する研究¹

——関連する諸要因の検討——

鉄 島 清 毅²

A STUDY ON APATHY TENDENCY OF UNIVERSITY STUDENT

—— An analyses of some relevant factors ——

Kiyotake TETSUSHIMA

The purposes of the present study were to construct an apathy tendency scale and to examine the relationship between apathy and ego identity, parental image, and motivation for entering university. First, 37 items were selected from past studies related to apathy. A reliable and valid scale of apathy (apathy tendency scale) was then constructed by statistical analyses. In addition to the apathy tendency scale, the following four scales were administered to 381 university students (140 males and 241 females): Rusmussen's ego identity scale, two measurements of parental image, and a scale of motivation for entering university developed by Fuchigami (1984). The main findings were as follows: 1) Identity confusion and unfocused motivation for entering university influenced strongly the tendency for apathy. 2) Differences between males and females responding to the parental image measurement were found. The image of the paternal mother was important to male students. The psychological distance between mother and daughter was found important to female students.

Key words: apathy, Identity, parental image, motivation for entering university.

問題と目的

スチューデント・アパシー (student apathy³) は、Walters (1961) によって「男性性確立に葛藤を持ち、予想される敗北や失敗を怖れ、学業における競争を回

避しようとする反応」として注目され、これまでこうした学生の特徴・家族関係・治療等について様々の言及がなされてきた。

我国では、丸井 (1967) が「意欲減退型留年」の急増現象を指摘し、笠原 (1973) は特有な無気力を示す大学生を「神経症性アパシー」と仮称し、その特徴について次のように述べている。それは、①男性が主である、②心理学的特徴として同一性探求 (identity seeking) が見られる、③病前性格は几張面、完全主義、凝り性である、④主観的病像は現実からの退避、内的空虚感、無気力感、自己本来の課題への選択的無関心、自我同一性の不確かさなどがあり、客観的には、過度の知性化、社会的関与の欠如、異性との交友の貧困が見られる、⑤ Walters の主張する精神力動 (競争という人間関係が不可避となるような状況からの退避) が我国の青年におい

1 本研究は同著者による修士論文 (1991) を新たに分析、検討したものである。

2 東京少年鑑別所 (Tokyo classification home)

3 「意欲減退学生」、「学生無気力症」などと訳される。また、単に「アパシー」と呼ばれることもある。アパシーは本来、精神分裂病の一症状を示す言葉であったが、それが拡大されて、現代青年の心理特性を表わす言葉として転用されたもの (小田, 1990) である。本論文においては、上記のように広義な意味では「アパシー」、一般学生を対象とした狭義な意味では「アパシー傾向」を用いた。

ても妥当する、⑥治療に際しては、彼らの psychosocial moratorium を認めることが重要である、の6点であり、今日の我国のアパシー研究において最もよく引用されている。さらに、笠原(1978)は、無気力反応とかアパシーに替わる新しい神経症類型の1つとして「退却神経症」を提唱し、上記③の病前性格⁴についても、さらに整理を試みている。

しかし、アパシーの症例が多く取り上げられるに伴ない、その退却の程度により、大きく「不完全な退却」と「完全な退却」との2群に分けないと混乱が生じる(山田, 1984; 湊, 1990)ことが指摘されるようになり、現在では、アパシーを退却の程度により分けてとらえていくのが一般化している。例えば、笠原(1978)の paranoiose 群と borderline 群、石井(1971)のアパシー中核群と、鬱病との境界例の群に分けたとらえ方はその先駆的なものであり、最近では土川(1990)が典型例I型と典型例II型などに分類してとらえている。だが、これらの分類のみでは、一般学生にまで拡大したと言われるアパシーの問題を十分に整理したとはいえないであろう。

また、アパシーの定義についても各研究者によって多少異なり、統一したものはない。それらは、①「学業に対する選択的退却」(土川, 1985; 佐々木, 1985 他)とする定義、②精神病および頭部外傷に基づく意欲減退を厳密に除外する定義(稲村, 1989)、③上記以外に「秀才アイデンティティの挫折」(山田, 1981)のように研究者なりの独自の表現を用いた定義、などに分けられる。

上述のようなアパシーの特徴や定義の曖昧さに対して、無気力のレベルを階層化した土川(1990)の分類構造図(Fig.1 参照)は、研究者が扱う無気力の質や程度を明確にしているため、有益であると思われる。土川(1990)は、アパシーの概念の曖昧さを明確にする時期にきていることを指摘しているが、これを受けて、本研究では、どのレベルの無気力を扱うのかを明確にし、アパシーの実証的研究を行う。

本研究では、対象を、治療的援助が必要とされる臨床群の学生ではなく、土川(1990)の分類構造図の底辺にある一般学生とし、そのアパシー傾向(発達上の一過性のものも含める)について考察する。このことを考慮し、定義についても以下のような操作的手順を用いた。数多くの定義を検討していくと、①精神病の無気力と異なる、②心理的原因から生じる、③主として学生の本業とされる学問に対して意欲の減退を示す、④同時に

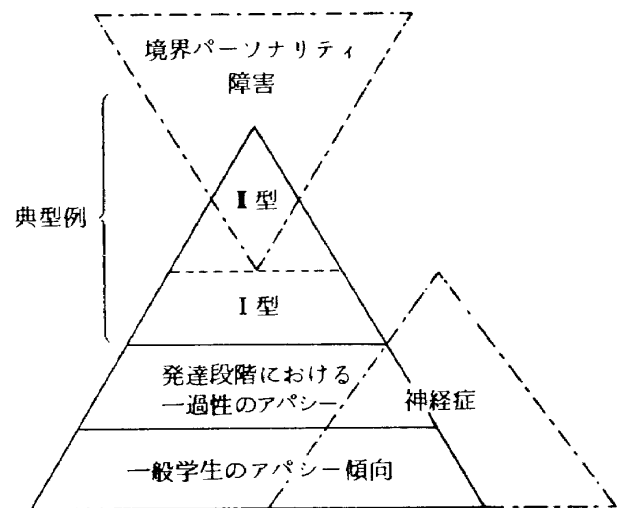


FIG. 1 スチューデント・アパシーの分類構造図

他の領域でも活動性が低下し、引きこもりがちとなる、の4点が共通する。しかし、④は重症のアパシーと考えられ、一般学生のアパシー傾向の検討を試みる本研究の立場と離れると判断し、これを除くことにした。したがって①～③を採用して本研究では、アパシー傾向を「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義した。

ところで、これまでのアパシーの実証的研究においては、典型的な症例を扱った研究(山田, 1984; 土川, 1989 他)や精神病の無気力についての研究(Mundt, 1983; Mesones, 1981; Jacewicz, 1982 他)は多く見られるが、一般学生のアパシー傾向を実証的に扱った研究は少ない。この方向の研究として、Coffield & Bucklaw (1986)が一般学生のアパシー傾向の研究をしているが、それも性・学年・学部ごとにアパシー傾向の差異を検討した程度である。我国では、意欲減退検査を作成した上地ら(1981)の研究、稲木(1983)が、アパシー傾向の高い学生の類型化を試みた研究、松本(1988)が、「意欲の欠如した学生は漠然とした動機で大学に進学している」と指摘した研究などがある程度である。一般学生のアパシー化(土川, 1985)が叫ばれる今日、この種の研究は重要であると思われる。

これらの先行研究に共通する問題点として、まず、使用される尺度がアパシー傾向を測定するものとして適切であるかという点がある。Coffield & Bucklaw (1986)の研究でアパシー傾向を測定するために用いられた PIL (Purpose in Life Test) は、フランクルの考えに基づく実存的欲求不満の数量化を目的とした尺度で、

4 笠原(1981)は病前性格について、「DSM-IIIの回避型性格+強迫的な生き方」と明確化している。

アパシー傾向を的確にとらえているか疑問がある。また、意欲減退診断検査(上地, 1981)も、主体的に感じられる意欲の減退から、大学環境、社会環境に対する意欲の減退にまで及んでおり、アパシー傾向に対するとらえ方が曖昧で拡散しているように思われる。そこで本研究では、アパシーを明確に概念規定し、信頼性・妥当性のある尺度を作成することを第1の目的とした。次に、事例を扱った数多くの研究で、アパシーの要因についての様々な論及がなされているにもかかわらず、それらを十分に生かした実証的研究が行われていないことが挙げられる。そこで本研究では、過去の諸研究において指摘されたアパシーの要因を、①個人的要因、②家族要因、③学校要因、の3つに大別・整理し、一般学生のアパシー傾向との関連を実証的にとらえることにした。

「個人要因」としては、青年期固有の発達課題である自我同一性からの言及が中心である。これは、同一性の拡散障害(①過剰な同一性、②選択の回避と孤立感・空虚感・麻痺、③対人的かわりの拒否と孤立、④時間的展望の拡散、⑤勤勉さの拡散、⑥否定的同一性)をスチューデント・アパシーの重要な発生機制の一つととらえる立場(馬場, 1976)である。これ以外にも多くの研究者が、アパシーを identity seeking (笠原, 1973)、Marcia の同一性拡散型や早期完了型(佐治, 1976)、自己不確実感および性的同一性の混乱(山本, 1976)、自我同一性の未確立による方向喪失感(福島, 1981)など、自我同一性の確立過程にまつわる葛藤としてとらえている。

「家族要因」については、Walters(1961)が、アパシーの症例に見られる父親の特徴を、「力強く、権威的で、過干渉である」と指摘して以来、父親の性格類型に関心が向きがちであった。しかし、最近の我国の研究では、「強い父親と」「影の薄い父親」との2つのタイプがあり、1つには絞り切れないとする意見があり(土川, 1977; 井上, 1986 他)、検討の余地を残すものと思われる。この問題に関して、山田(1990)は父親の単なる性格類型以上に、青年の側の親イメージの重要性を指摘し、さらに今までさほど注目されなかった母親の役割の重要性を取り上げている。そこで、本研究では、両親に対するイメージという視点からアパシー傾向との関連をとらえていくことにしたい。

「学校要因」に関しては、特に進学動機に関する言及が多い。唄中(1981)は、「進路選択の過程で生起し、あるいは整理・解決されずに残った問題は、大学入学後に様々な形でキャンパスでの不適応として顕在化する」と述べ、進路選択の重要性を指摘している。アパ

シーに陥った学生の進学動機も多くは無目的であり、情報把握も甘く、自らの進路についての主体的な選択がなされていないことが指摘されている(笠原, 1978; 山田, 1980; 土川, 1981 他)。

以上の諸点を踏まえ本研究では、

- (1)本研究で用いる概念規定に基づき、アパシー傾向を測定する尺度を作成し、
- (2)一般学生のアパシー傾向を3つの視点、すなわち自我同一性の確立の程度、両親に対して抱いているイメージ、進学動機のあり方、との関連から検討する。

方 法

被験者 国立C大学および私立B大学の学生合計381名(男子140名, 女子241名)、なお、C大学の一部の学生については、1週間後、アパシー傾向を測定する質問紙のみ再度実施した。この2回とも回答した者は153名(男子55名, 女子98名)であった。

質問紙 (1)アパシー傾向を測定する質問紙(上地, 1981 他を参考に作成した37項目; 6段階評定)。その作成の手続については、以下の分析Iで述べる。(2)自我同一性尺度(Rasmussen, 1961 を宮下, 1987 が邦訳した下位尺度Vの12項目; 6段階評定。この下位尺度Vは、Erikson の発達図式の第V段階[同一性 vs 同一性拡散]に対応する)。(3)両親イメージについては次の2点から測定を行った。①加藤ら(1981)による21項目の形容詞対; 7段階評定。②亀口(1990)の用いた家族イメージ図(主として両親イメージをとらえることを意図した投影法の検査: 記述式)。(4)進学動機を測定する尺度(測上, 1984 を参考に作成した17項目; 5段階評定)。(5)大学での行動傾向を調査する項目(授業への出席率、留年の有無、サークル・アルバイトへの参加度、入学時の満足度、をみる4項目から構成されている)。

実施法および調査時期 上記の5種類の質問紙を冊子とし、授業時間を利用して集団的に実施した。回答所要時間は20~30分であった。調査時期は1991年1月~5月であった。

結果の処理法

(1)自我同一性尺度では、各項目とも同一性の確立の程度が高いほど高得点となるようそれぞれ5~1点を付与し、項目一総得点間の相関係数算出により項目分析を行った。その結果、12項目のすべてに有意な相関($r = .258 \sim .665$, いずれも $P < .01$) が認められ、総得点を算出した。

(2)両親イメージを測定する形容詞対の項目については、肯定的なイメージを抱くほど高得点となるよう各項目に7~1点を付与し、「父親」、「母親」別に因子分析(主

因子解)を行い、4因子を抽出し、これに Varimax 回転を施した。1つの因子にのみ.40以上の負荷を有することを条件に単純構造をなす項目を選択した。この結果に基づいて因子の解釈を行うと、父親イメージでは、第1因子(F1)は「やさしさとあたたかさ」、F2は「明朗性」、F3は「誠実さ・まじめさ」、母親イメージでは、F1は「明朗性」、F2は「やさしさとあたたかさ」、F3は「誠実さ・まじめさ」とそれぞれ命名され、以下、各因子ごとに1因子のみに有意な負荷量を持つ項目の総得点を算出した。また、家族イメージ図は、亀口(1990)に従って「本人と父親との距離」、「本人と母親との距離」、「家族の面積」、「夫婦間の距離⁵」を測定し(単位はcmあるいはcm²、小数点第2位以下を四捨五入)、数量化した。

(3)進学動機を測定する質問項目については、各項目に5～1点を与え、(2)と同様の手続で因子分析を行った。これらの因子は、F1は「周囲への配慮の機能」、F2は「大学の副次的機能」、F3は「大学の本来的機能」と命名され、以下、各因子ごとに1因子のみ有意な負荷量を持つ項目の総得点を算出した。

結果と考察

分析Ⅰ. アパシー傾向測定尺度の作成

(1)質問項目の作成

本研究ではアパシー傾向を目的で述べたように定義し、上地(1981)の意欲減退診断検査、学力向上要因診断検査(FAT)、アパシーに関する文献などを参考にし、37項目を作成した。その際、項目の内容的妥当性の吟味も行い、2名の判定者の判断が一致したものを採用した。

(2)項目分析

作成した37項目について、それぞれ6～1点を付与し得点化を行った。そして、総得点の上位・下位各々約25%(91名、86名)を抽出し、GP分析(t検定)を行った。その結果、全項目に有意差($P<.01$)が認められた。

(3)因子分析

項目分析を通過した37項目について因子分析(主因子解)を行い、3因子を抽出した。これに Varimax 法による直交回転を施した。1つの因子のみ絶対値.35以上の負荷を有する項目を整理したものが、TABLE 1である。第1因子(F1)は「授業からの退却」(12項目)、F2は「学業からの退却」(12項目)、F3は「学生生活からの退却」(7項目)と解釈された。この31項目の総得点

の分布を示したものが、FIG. 2である。以下、単純構造をなす項目の合計得点により、それぞれの下位尺度得点および全体得点を算出した。この31項目からなる尺度を「アパシー傾向測定尺度」と呼ぶ。

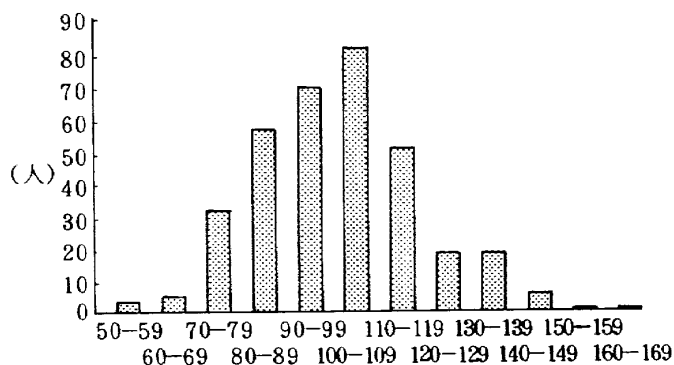


FIG. 2 アパシー傾向測定尺度の得点分布

(4)尺度の信頼性

アパシー傾向測定尺度の31項目ならびに下位尺度について折半法(前後折半)、および α 係数による信頼性係数を算出した(TABLE 2参照)。下位尺度では第3因子(F3)の数値がやや低くなっているが、その他はすべて.70～.80程度の数値を示している。さらに31項目の全体では折半法、 α 係数ともに、.877の値を示しており、この観点からの信頼性は十分であるといえよう。

次に、アパシー傾向測定尺度を1週間間隔で2回実施したデータの相関係数を算出し、TABLE 3に示した。これによれば、下位尺度および全体ともに.80以上の数値を示しており、再検査法による信頼性は十分に高いといえる。

以上により、アパシー傾向測定尺度は、内的整合性の観点からも、安定性の観点からも高い信頼性を持つと言える。

(5)尺度の妥当性

尺度の妥当性については、授業への出席率との関連から検討した。まず、先の質問紙(5)の大学での行動傾向を問う項目の「授業への出席率(授業全体・必修科目別)」と、アパシー傾向測定尺度の下位尺度および全体得点との相関係数を算出した。この結果を示したものが、TABLE 4である。それによれば、下位尺度のF2、F3の数値がやや低いものの、いずれも有意な負の相関(あるいは傾向)が得られた。これは、学生の自己報告という形ではあるが、尺度の妥当性の一端を示す結果といつてよからう。

次に、尺度の総得点の上位群と下位群(各々約25%を抽出)で、実際の授業への出席状況(C大学でランダムに2

5 「夫婦間の距離」は亀口の方法に、筆者がオリジナルに加えたものである。

TABLE 1 アパシー傾向を測定する項目の因子分析結果

項 目	F 1	F 2	F 3	h ²
必修科目などの重要な授業にも、つい出る気がなくなって欠席してしまうことがある	.853	.049	.089	.737
出席が重視される授業でさえも休みがちである	.829	.033	.138	.706
何となく授業をさぼることがある	.819	.140	.000	.690
大学内にいても、つい授業に出るのが面倒臭くなって欠席してしまうことがある	.791	.066	.041	.631
生活のリズムが一定しないために、午前中の授業は欠席しがちである	.753	.055	.045	.572
朝寝坊などで授業に遅れることが多い	.650	.199	-.063	.466
特別な理由がないのに重要な試験を受けずにいる	.589	-.167	.135	.393
授業は何よりもまず第一に優先している	-.573	-.204	-.008	.370
大学からの連絡事項などについてはほとんど関心がなく、人から教えられることが多い	.500	.230	.184	.336
授業の履修を真剣に考えなかったために、後になってから困ることが多い	.498	.143	.334	.380
授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う	.436	.100	-.015	.200
授業中にマンガを読んだり、落書きをすることが多い	.423	.189	.058	.218
教師に言われなくても自分から進んで勉強する	-.037	-.637	-.225	.457
授業は積極的に参加するというよりも、いつもただ座っているだけという感じだ	.207	.585	.247	.446
勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	.078	.589	.299	.419
勉強で疑問に思う時はすぐに調べる	.003	-.536	-.070	.292
出来栄は納得しなくても、レポートは提出さえすればよい	.052	.521	-.023	.274
これまでと同じように勉強や課題が良く出来る	-.241	-.475	-.235	.338
授業で取り上げられた参考書には目を通す方である	-.167	-.464	-.004	.243
「早く授業が終わればいい」としばしば思う	.171	.443	.044	.227
時間を忘れて勉強することがある	.061	-.435	-.246	.253
授業で疑問に感じられる箇所があれば積極的に教師に質問に行く	-.099	-.384	.006	.157
卒業に必要な単位を取得していても、自分の興味関心にあった授業は取るようにしている	-.249	-.377	-.184	.237
好きな教科(科目)は一生懸命勉強する	-.093	-.374	-.213	.193
一つの課題に打ち込むことが出来ない	.077	.309	.647	.520
大学で交流のある人といえば、共通の関心事のある人が数人いる程度だ	.065	-.075	.586	.353
自分の興味のある事柄さえ、あまりエネルギーをそそぐ気がしない	-.004	.147	.579	.356
大学での勉強もアルバイト活動などもあまりやる気が起らない	.046	.298	.559	.403
注意を集中するのは他の人より苦勞する	.071	.278	.513	.345
私は大学の友人と一緒にいるよりは、自分の部屋で本を読んだり映画に行ったりする方が好きである	.079	-.295	.434	.281
大学での時間は私の生活の中で有意義である	-.318	-.187	-.385	.284
寄 与 率 (%)	18.13	11.47	8.43	38.03

回の出席調査を実施)の差異を分析した(TABLE 5 参照)。これによって尺度の得点により実際の出席率にも差があり($\chi^2=17.66, P<.01$)、アパシー傾向測定尺度の得点の高いの方が実際の出席率も悪いことが明らかにされた。

以上、自己評定および実際の出席率により尺度の妥当性を検討したが、いずれも有意な数値(あるいは傾向)が得られ、尺度の妥当性は低くないと判断される。

妥当性についてはさらに、尺度の得点が極めて高い数値を示した者との面接(上位10%以上で協力が得られた

TABLE 2 アパシー傾向測定尺度の折半法および α 係数による信頼性係数

下位 尺度	F 1 (授業から の退却)	F 2 (学業から の退却)	F 3 (学生生活 からの退却)	全体
r ^(a)	.881	.730	.739	.877
α 係数	.881	.775	.667	.877

注) r : Spearman-Brown の公式による信頼性係数

TABLE 3 アパシー傾向測定尺度の再検査信頼性係数

下位 尺度	F 1 (授業から の退却)	F 2 (学業から の退却)	F 3 (学生生活 からの退却)	全体
r	.876**	.836**	.804**	.870**

** P<.01

TABLE 4 アパシー傾向測定尺度得点と授業への出席率(本人の自己評定による)との関係

	F 1 (授業から の退却)	F 2 (学業から の退却)	F 3 (学生生活 からの退却)	全体
授業全体 への出席率	-.681**	-.170**	-.088**	-.516**
必修科目 への出席率	-.543**	-.073*	-.071*	-.389**

** P<.01 * P<.05 + P<.10

14名)によっても検討した。その結果、すべての対象者が、直接的もしくは間接的に意欲の減退を感じている

TABLE 5 アパシー傾向測定尺度の上位・下位群
の実際の出席率の差異

アパシー得点	2回欠席	1回出席	2回出席	合計
上位群H ^(a)	17名	17名	12名	46名
下位群L	2名	13名	26名	41名
合 計	19名	30名	38名	87名

注) H:上位群 L:下位群 $\chi^2=17.66$ (P<.01)

と述べ、本尺度が、授業への出席率の低下という面だけでなく、主観的な無気力感をもの確にとらえることが可能であることが明らかにされた。

分析II. アパシー傾向と諸要因との関係

アパシー傾向測定尺度得点(全体得点)を従属変数、両親イメージ・進学動機の各因子得点、自我同一性得点、家族イメージの合計14変数を独立説明変数として、重回帰分析を実施した。結果は、性差が予想されるため、男女別に検討するとともに、アパシー傾向測定尺度の下位尺度ごとの分析も行った。その結果をまとめたものが、TABLE 6~7である。

TABLE 6 男子の重回帰分析の結果(数値は標準偏回帰係数)

	全 体	F 1 (授業 からの退却)	F 2 (学業 からの退却)	F 3 (学生生活 からの退却)
自我同一性	-.316**	-.278*	-.057	-.497**
父親 イメージ	やさしさと あたたかさ	-.091	-.108	-.151*
	明朗性	-.118	-.101	-.026
	誠実さ・まじめさ	-.068	.073	-.118
				-.233**
母親 イメージ	明朗性	.019	.108	-.051
	やさしさと あたたかさ	-.119	-.199*	.013
	誠実さ・まじめさ	.241*	.196*	.184*
				.128
家族 イメージ	父子間の距離	-.013	-.010	-.046
	母子間の距離	-.019	-.044	.185
	夫婦間の距離	-.081	-.024	-.243**
	家族の面積	.090	.124	.046
進学 動機	周囲への 配慮の機能	.030	-.023	.108
	大学の副次的機能	.343**	.177*	.411**
	大学の本来的機能	-.313**	-.142	-.425**
				-.183*
重相関係数	R=.696	R=.521	R=.717	R=.670

** P<.01 * P<.05 + P<.10

TABLE 7 女子の重回帰分析の結果(数値は標準回帰係数)

	全 体	F 1 (授業 からの退却)	F 2 (学業 からの退却)	F 3 (学生生活 からの退却)
自我同一性	-.330**	-.212**	-.198**	-.503**
父親 イメージ	やさしさと あたたかさ	-.055	-.147*	-.065
	明朗性	.106	.176*	—
	誠実さ・まじめさ	-.092	-.012	-.044
				-.140*
母親 イメージ	明朗性	.070	.173*	-.015
	やさしさと あたたかさ	—	-.216*	.206*
	誠実さ・まじめさ	.045	.051	—
				—
家族 イメージ	父子間の距離	-.049	-.033	-.049
	母子間の距離	.220*	.121	.170*
	夫婦間の距離	-.089	-.108	-.019
	家族の面積	-.017	-.030	-.039
進学 動機	周囲への 配慮の機能	-.084	-.098	-.050
	大学の副次的機能	.332**	.287**	.322**
	大学の本来的機能	-.297**	-.065	-.457**
				-.227**
重相関係数	R=.590	R=.445	R=.588	R=.586

** P<.01 * P<.05 + p<.10

TABLE 6によれば、男子のアパシー傾向測定尺度「全体得点」の重相関係数はR=.696(F=6.19, P<.01)であった。標準偏回帰係数が有意なものを上位から列挙すると、まず「進学動機」の「大学の副次的機能」であり、正の寄与を示した。第2位は「自我同一性」、第3位は「進学動機」の「大学の本来的機能」であり、それぞれ負の寄与を示した。第4位は「母親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」で、正の寄与を示した。

次に下位尺度について検討すると、大旨「全体得点」の結果と同様であったが、①「授業からの退却」では、「進学動機」の「大学の本来的機能」が有意な寄与を示していない、②「学業からの退却」では、「自我同一性」が有意な寄与を示しておらず、また「夫婦間の距離」で有意な寄与を示している、③「学生生活からの退却」では、「父親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」が有意な寄与を示している、点などが「全体得点」と異なる結果を示していた。

同様に女子における「全体得点」の重相関係数はR=.590(F=6.68, P<.01)であり、男子と同様有意であった。標準偏回帰係数が有意なものを上位から列挙すると、「進学動機」の「大学の副次的機能」が第1位の寄

与(正)を示した。第2位は「自我同一性」、第3位は「進学動機」の「大学の本来的功能」であり、ともに負の寄与を示した。第4位は「家族イメージ」の「母子間の距離」であり、負の寄与を示した。

次に下位尺度について「全体得点」の結果と比べると、①「授業からの退却」では、「父親イメージ」の「明朗性」、および「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」、「明朗性」が有意な寄与を示し、また、「家族イメージ」の「母子間の距離」や、進学動機の「大学の本来的功能」は有意な寄与を示していない、②「学業からの退却」では、「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」が有意な寄与を示している、③「学生生活からの退却」では、「父親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」、および「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」が有意な寄与を示し、また「家族イメージ」の「母子間の距離」や、「進学動機」の「大学の副次的機能」は有意な寄与を示していない、などが異なる点であった。なお、「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」は3つの下位尺度のすべてにおいて有意な寄与を示したが、その方向は一定ではなかった。

以下、上記の結果について若干の考察を行う。

説明変数による重相関係数は、男女ともに有意であり、本研究で用いた変数がアパシー傾向を説明する要因として妥当であることが示されたといえる。しかし、女子の数値は有意ではあるが男子より若干低く、今後さらに検討の必要があろう。

また、男女とも「自我同一性」および「進学動機」に大きな寄与を示す変数が集中している。これは同一性確立という課題への取り組み方、大学進学に対しての目標の持ち方が、大学生のアパシー傾向と深くかかわっていることを示している。このことは「同一性拡散と曖昧な進学動機」をアパシーの特徴として指摘して笠原(1973)、長谷川(1980)、舩中(1981)、村瀬(1984)らを支持する結果といえる。

その際、これら2つの要因を下位尺度から検討すると、それぞれ退却がおよぶ範囲によって差異が見られ、この点は検討する意味があろう。まず、特徴的なのは、「学生生活からの退却」の下位尺度において、「自我同一性」の数値が特に高くなっている点である。つまり学生生活全般に及ぶような広範囲な退却⁶では、根底

に自我同一性の未確立による方向喪失感(福島, 1981)があり、その無気力も深刻であることを示しているのではないと思われる。また、この下位尺度で、女子の「進学動機」の「大学の副次的機能」が有意な寄与を示していないが、このことも同一性確立過程の葛藤の大きさを示すものとして考えられよう。次に男子の「学業からの退却」において「自我同一性」が有意な寄与を示しておらず、「進学動機」の「大学の副次的機能」と「大学の本来的功能」が高い数値を示しているが、この下位尺度では「自我同一性」の問題以上に、進路決定時に大学進学を目的を明確に定めなかったことが大きく影響し、入学後に始めて自らの適性等に疑問を抱き、学業への意欲も消失していくことを示しているのではないと思われる。一方、「授業からの退却」の下位尺度では、男女ともに「進学動機」の「大学の本来的功能」が有意な寄与を示していない。この種の退却を示す学生は、「本来的な」動機に対してもタテマエとして、一応の価値を認めており、むしろアパシー傾向と大きくかかわっているのは、「副次的な」動機が、どの程度の意味合いを持って大学に進学しているかという点にあることを示したものかもしれない。

これらのことから、「自我同一性」および「進学動機」は、退却の程度によって、2つの要因が関与する度合いが異なっているのではないかと予想される。つまり、「授業」という限定的な場面からの退却では、「自我同一性」と、「進学動機」における副次的な機能にほぼ同程度のウェイトであるが、「学業」といったレベルの退却では、「進学動機」の曖昧さ・消極さが最も大きな意味を持ち、さらにもっとも広範囲の「大学生活」そのものからの退却においては、根底に同一性の探求という大きな問題が存在していると考えられよう。

他方、両親に対するイメージに関しては、男女で若干異なる結果が得られた。すなわち、「全体得点」の分析では、男子で「母親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」が、女子で「家族イメージ」の「母子間の距離」がともに有意な正の寄与を示した。これは、母親の存在の重要性を意味するだけでなく、男女それぞれ異なった視点から母親イメージを検討する必要があることを示唆するものと思われ、従来の研究ではほとんど言及されていない点である。

男子の「全体得点」で有意な寄与を示した「母親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」は「けじめのある」、「責任感のある」、「しっかりとした」、「まじめな」の4項目から成り、従来の母性的なイメージというより、むしろ父性的なイメージであるように思われる。つま

6 「学生生活からの退却」の下位尺度は、尺度得点の上位群と下位群において、サークルおよびアルバイトへの参加状況にも大きな差($P<.01$)が認められ、この下位尺度をより広範囲な退却を示すものとして解釈した。他の下位尺度では、尺度得点の上位群と下位群で、こうした差は見られなかった。

り、母性に欠ける父性的な母親イメージが、男子のアパシー傾向と深く関わっていることが推察される。次に、下位尺度について検討すると、男子の「学生生活からの退却」の下位尺度において、「父親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」が有意な寄与を示した。これは父性的なものを欠いた父親像が浮かび上がり、辻(1971)や土川(1977)らの指摘に一致するものであった。

一方、女子における「母子間の距離」の有意な寄与は、母親との心理的な距離が、女子のアパシー傾向と深く関わることを示していると思われる。大学生という時期は、青年期前半に拡大した親子の距離が、成長と共に再び歩み寄り(加藤, 1989)、親と子の境界が柔軟化する時期(Rhodes, 1977; Cater & McGoldlick, 1980 他)と考えられる。これらを考慮するならば、女子では、親子、特に母親との心理的距離が、年齢にふさわしい変化を遂げていないことが「意欲の減退」の1つの要因になっていると考えてよいのかもしれない。また、女子の下位尺度について検討すると、有意な寄与を示す変数は多く見られたが、「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」のように、下位尺度により、その寄与の方向が一定でないものが認められた。この寄与の方向が異なるという結果は、アパシー傾向の高い女子学生が母親像を一つに絞り切れていないことの一端を示しているとも考えられる。「授業からの退却」の下位尺度では、「父親イメージ」、「母親イメージ」ともに「明朗性」が有意な正の寄与を示している。これは、退却の程度がさほど深刻でない場合には、両親に対し常にネガティブなイメージを抱いているとは限らないことを示しているのかもしれない。しかしその一方で、この下位尺度の「父親イメージ」、「母親イメージ」の「やさしさとあたたかさ」において、有意な負の寄与(あるいは傾向)を示していることを考慮すれば、その根底には冷ややかな父親像・母親像が予想されよう。また、「学生生活からの退却」の下位尺度において、「父親イメージ」の「誠実さ・まじめさ」が有意な負の寄与を示している。これは、広範囲な退却においては、男子同様、父性的なものを欠いた父親像が大きな意味を持つのではないかと考えられる。

これらより、アパシー傾向と両親に対するイメージとの関係についてまとめると、男子大学生では、情緒的な暖かみよりも、けじめや責任感を強調する父性的な母親像があり、さらに深刻な退却に陥るか否かに関しては、父親の父性というものが大きくかわっている。つまり、父親・母親それぞれにおける「父性」というものが1つのキーとなるように思われる。これが

極端な崩れ方をした場合は、症例で指摘されるような「父性の拒否(山田, 1984)」へとつながっていくのではないかと予想される。女子学生については、母親との心理的距離が大きな意味を持っている。さらに、SD法から具体的なイメージを絞ることは困難であるが、退却の程度を左右するのに、やはり父性の問題が関与してくるというよいのかもしれない。

以上、一般学生のアパシー傾向の要因として「自我同一性」、「両親イメージ」、「進学動機」を取り上げ、重回帰分析を用いてアパシー傾向との関連を検討した。「自我同一性」と「進学動機」に関しては、従来の指摘を支持するような結果が得られた。しかし、「両親イメージ」に関しては、性差が大きく、特に女子の場合は、本研究で用いた変数のみではやや不十分であった可能性もある。これについては、今後、新たな変数を設定するとともに、家族イメージを測定する方法に工夫・洗練を重ねていきたいと考えている。

引用文献

- 馬場謙一 1976 自我同一性の形成と危機 —E.H. エリクソンの青年期論をめぐって— 笠原嘉ら(編) 青年期の精神病理 I 至文堂 Pp. 111—128.
- Carter, E.A., & McGoldlick, M. (eds.) 1980 The family life cycle : A framework for family therapy. New York : Gardner press. Pp. 3—20. (岡堂(1988)より)
- Coffied, K.E., & Buckalew, L.W. 1986 Student apathy : An analysis of relevant variables. *College Student Journal*, 20, 211—214.
- 淵上克義 1984 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59—63.
- 福島 章 1981 青年期のカルテ —受験世代の心理と病理— 新曜社
- 長谷川 浩 1980 スチューデント・アパシー 大原健士郎(編) 思春期・青年期の異常心理 新曜社 Pp. 144—157.
- 細江達郎・土川隆史他 1977 Student Apathy をめぐって 学生相談シンポジウム(東京学生相談所)(山田(1984)より)
- 稲木 順 1983 大学生の意欲減退に関する研究 —質問紙による類型化と成人度・適応との関連— 名古屋大学卒業論文(未公刊)(土川(1985)より)
- 稲村 博 1989 若者・アパシーの時代 —急増する無気力とその背景— NHK ブックス

- 井上洋一 1986 現代青年の無気力 馬場謙一ら(編) 病めるこころの深層 有斐閣 Pp. 81-106.
- 石原賢一 1981 学習意欲の診断法 教育心理, 29, 462-467.
- Jacewicz, K.H., & Warnecka, P.M. 1982 A contribution to the discussion on the etiology of apathic-abulic syndromes. *Psychiatria Polska*, 16, 145-150.
- 亀口憲治・浦部雅美 1990 問題を抱えた子供の家族イメージにおける特異性 日本家族心理学会第7回大会発表論文集, 31.
- 笠原 嘉 1973 現代の神経症性 —特に神経症性アパシー(仮称)について— 臨床精神医学, 2, 153-162.
- 笠原 嘉 1978 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱 中井久夫ら(編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版 Pp. 287-319.
- 笠原 嘉 1981 スチューデント・アパシー第3報 石井完一郎ら(編) 現代のエスプリ168 至文堂 Pp. 24-28.
- 笠原 嘉 1984 現代のオブローモフたち 大学と学生214 第一法規
- 笠原 嘉 1990 退却神経症 講談社
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 —その変容と多様化— 誠信書房
- 松本恒之 1988 学生生活における意欲欠如の要因 大学と学生264 第一法規
- 丸井文男 1967 大学生のノイローゼ —意欲減退症候群— 教育と医学, 15, 476-483.
- Mesones, H.L. 1981 Metabolic disorder in adolescents. *Neuropsychiatry salud mental*, 12, 49-51.
- 湊 博昭 1990 スチューデント・アパシー 臨床精神医学, 19, 855-860.
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.
- Mundt, Ch. 1983 The syndrome of residual apathy in schizophrenics: A psychopathological long-term study. *Nervenarzt*, 54, 131-138.
- 村瀬孝雄 1984 現代学生の意識と行動 大学と学生214 第一法規
- 小田 晋 1991 子どものアパシーとは何か 教育心理, 39, 90-95.
- 岡堂哲雄 1988 家族心理学の理論と実際 金子書房
- Rhodes, S.L. 1977 A developmental approach to the life cycle of the family. *Social Work*, 30, 310. (岡堂(1988)より)
- 佐治守夫 1981 学生のアパシー現象 佐治守夫ら(編) ノイローゼ 有斐閣 Pp. 223-238.
- 佐々木正宏 1985 無気力と内閉 中西信男ら(編) 現代青年の理解と指導 福村出版 Pp. 156-171.
- 嶋中 達 1981 受験体制と進路選択 笠原嘉ら(編) キャンパスの症候群 至文堂 Pp. 32-53.
- 鉄島清毅 1989 家族病理における意味 文教大学卒業論文(未公刊)
- 土川隆史 1981 スチューデント・アパシー 笠原嘉ら(編) キャンパスの症候群 至文堂 Pp. 143-166.
- 土川隆史 1985 スチューデント・アパシーと生活リズム 教育心理, 33, 771-773.
- 土川隆史 1989 大学生のアパシー —スチューデント・アパシー再検討— 清水将之(編) 青年期の精神科臨床 金剛出版 Pp. 226-239.
- 土川隆史(編) 1990 スチューデント・アパシー 同朋社
- 辻 悟 1973 青年期における主体の硬直的な退却とその現代的背景 —不登校, いわゆる学生のアパシーを中心に— 精神医学, 15, 1279-1289.
- 上地安昭 1981 学生の意欲減退 石井完一郎ら(編) 現代のエスプリ168 Pp. 188-200.
- Walters, P.A. 石井完一郎ら(監訳) 1975 学生的情緒問題 文光堂 Pp. 106-120. (Walters, P. A. 1961 Student apathy. Blain, G.B. et al. (eds.) *Emotional problems and student*. New York: Appleton-Century-Crofts.)
- 山田和夫 1980 大学生の登校拒否 詫摩武俊ら(編) 登校拒否 有斐閣 Pp. 90-103.
- 山田和夫 1981 就職恐怖と卒業恐怖 —40例の臨床から— 山崎久美子(編) 現代のエスプリ266 至文堂 Pp. 65-73.
- 山田和夫 1984 アパシーと父性 季刊精神療法, 10, 149-154.
- 山本多喜司 1978 情緒の発達 岡堂哲雄(編) 青年期の心理 新曜社(長谷川(1980)より)

(1992.4.30受稿, 1993.2.27受理)